opusdei.org

黙想:四旬節第4主日 (C年)

黙想のテーマ:「回心の喜び」「父なる神の慈しみ深い 愛」「いつも良い点を見る」

回心の喜び

父なる神の慈しみ深い愛

いつも良い点を見る

四旬節半ばの今日、教会は間近に 迫ったイエスの死と復活を通しても たらされる私たちの救いを喜ぶよう 招きます。それゆえ、この日曜は 「喜びの主日(domingo laetare)」 として知られています。典礼では放 蕩息子のたとえ話が読まれます。そ こには御父の驚嘆すべき無限の慈し みと罪の悲しさ、そして回心の喜び が示されています。

このたとえ話の背景になっているの は、イエスが罪人たちを迎えて共に 食卓についているのを不審がったフ アリザイ人たちの陰口です。主は、 彼らの回心のために話されます。 「ある人に息子が二人いた。弟の方 が父親に『お父さん、わたしが頂く ことになっている財産の分け前をく ださい』と言った。それで、父親は 財産を二人に分けてやった。何日も たたないうちに、下の息子は全部を 金に換えて、遠い国に旅立ち、そこ で放蕩の限りを尽くして、財産を無 駄使いしてしまった」(ルカ15・ 11-13) 。

弟の姿は罪の現実を反映していま す。神がお与えになった賜を忘れ、 自分自身を傷つけるのです。「時 に、まさしく罪が『成功』をもたら してくれると思えることがあります が、真実は異なります。御父から離 れることは、常に(…)破滅をもた らします。人間としての尊厳と恵み という遺産が失われるのです | ෩。 このたとえ話から、罪とは、押し付 けられたルールを守らないといった ものではなく、必ず人に害を与える ものであることがわかります(悪魔 はそうではないと私たちを騙そうと します)。人間的、超自然的な真の 喜びは、回心によってもたらされま す。

「『まだ遠く離れていたのに、父親 は息子を見つけて、憐れに思い、走 り寄って首を抱き、接吻した』 (ル

カ15・20)。これは主のお言葉なの です。首を抱いて口づけをあびせた と書いてあります。いとおしくて仕 方がなかったのです。これ以上、人 間味にあふれた話し方ができるので しょうか。御父である神が、私たち に対して抱く愛を、これ以上生き生 きと描写することはできないでしょ う。私たちの方へ走り寄って来てく ださる神を前にして、口をつぐんで いるわけにはゆきません。聖パウロ と共に『アッバ、父よ』と呼びかけ ましょう。宇宙の創造主ではある が、立派な称号で呼ばれたい、その 主権に敬意を払って欲しいとはお思 いにならないのです。父と呼ばれた い、この呼び名をかみしめて味わっ て欲しい、お前たちに喜びを与えた い、と言ってくださるのです | 「21。

私たちの人生は、御父に立ち帰ることの繰り返しです。何度も始めること、そして再び始めることが必要です。立ち帰る度に、神の慈しみの愛

がいかに美しいかをさらに深く知る ことができます。主は威圧的な支配 者ではなく、私たちが恐れから掟に 従うことを望まれません。私たちの 自由を尊重する繊細さをもって、神 は私たちをいつも赦す心づもりでご 自分の方へ引寄せられるのです。

「わたしは天に対しても、またお父 さんに対しても罪を犯しました。も う息子と呼ばれる資格はありませ ん」(ルカ15・21)。このように息子は 考えます。しかし実のところ、私た ちは、自分が無限の善と慈しみを有 する御父の子であることを知ること によって、主が無条件に私たちを愛 してくださり、繰り返される不忠実 に対しても決して〈疲れてしまう〉 ことがないことを理解することがで きるのです。「父親の抱擁と接吻に より、彼は何があってもつねに自分 は息子だと思われていたと悟りま す。イエスのこの教えはとても大切 です。神の子であるわたしたちの身

分は、御父のみ心の愛がもたらす実りです。それは、わたしたちの功績や行いによるのではありません。したがって、だれもそれを奪うことはできません。」[3]。

たとえ話の父親の深い慈しみは、下 の息子の帰還を大喜びで迎えること に表れています。抱擁、接吻、新し い衣服と指輪、宴会、肥えた子 牛…。しかしその慈しみは、家で起 こっていることを見た長男の反応に も向けられています。確かに私たち は、この兄のことを頑固で妬み深い と、否定的に評価してしまうことが あります。しかしながら、父親は彼 にも慈しみをもって接します。息子 が自分の愛情に気が付かなくても、 それに感謝しなくても、立腹しませ h.

「御父は自分が罪人だと認める人を 待ち望み、自分が『正しい』と思っ ている人を探しに来てくださいま すして、実のところ、この二人の兄 弟はよく似ています。二人とも、自 身の確実さの中で生きていました。 形は違っていても、自分自身のこと だけを追い求めていたのです。一人 は、気ままに生きることを選びまし た。もう一人は、ある程度正しい倫 理観をもっていましたが、あたかも 良いことをする気力を失ってしまっ たかのようで、あまり幸せな生き方 をしているとは言えない状態でし た。聖ホセマリアが言います。「隠 れた生温さという危険を避けること が必要です。それは私たちを神から 引き離し、効果的でない存在にして しまう恐れがあります。それは、も うある程度のことは達成したと考え る生温さです。友だちもいます。外 的には活動しています。しかし接す る人たちの心を燃え立たせること

も、周りに温かい雰囲気を作ること もありません | ा₅。

「子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部規はいか15·31)と父親はこれを発表にいたちと共にいたちと共にいたちといる。主は私たちと共にないて全マリも含めて全でいます。慈しましたのように、助けをお願いしまったもして他者のしまるとに、おが、そして他者のによるよいできるにとどまることができるように。

[1] 聖ヨハネ・パウロ二世、説教、 1980年3月16日。

[2] 聖ホセマリア『知識の香』64 番。

- [3] フランシスコ、一般謁見演説、 2016年5月11日。
- [4] フランシスコ、「お告げの祈り」でのことば、2016年3月6日。
- [5] 聖ホセマリア、家族の集まりでのメモ(ロンドン)、1971年9月。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/meditation/mokusou-shijyunsetsu-shujitsu4c/(2025/12/17)